

審査員  
小野田 泰明(東北大学大学院工学研究科教授)  
馬場 正尊(オープン・エー/東北芸術工科大学 建築・環境デザイン学科教授)  
藤江 和子(藤江和子アトリエ)  
藤村 龍至(東京藝術大学美術学部建築科准教授/RFA)

## メッセー

## 小野田 泰明

(東北大学大学院工学研究科教授)

今、研究室の皆で、東日本大震災からの復興で災害公営住宅に入った人たちの暮らしを調べている。これまでは、住宅の立地や年齢・家族型・居住歴といった居住者の性向が、コミュニティに影響を与える重要指標だと言われてきた。もちろん、それは正しいのだが、数は少ないが、建築家が関わってコミュニティを志向した災害公営住宅が建てられた地域を調査すると、そうした住宅の方が、通常の住宅より少しだけ出会いの機会が多そうということが分かってきた。人間の行為に空間が関係するやり方は、弱い親和力というべきもので、非直接的で、効用を説明するのは難しい。しかし、建築が存在する限り、じんわりと効き続けるか弱い重要な力は、確実に存在する。

「コスパ」という呪文にとらわれた人々が、短期的な効用を目指して競い合う。また、そうしたメインストリームからの逸脱が容赦なく叩かれる時代にあって、遅効性の力の存在を主張することは大変でもある。しかし、だれかがこの力を埋め込んでいかなければ、我々の社会は、様々な物事を受け止める冗長性を欠落し、未来を切り開く創造性を減じた、非寛容な場所になってしまう。

「これからの建築士賞」が待っているのは、困難な時代に長い時間の種を植え続ける、不思議な職能なんだと思う。今年も色々な試みに出会えるのが楽しみだ。

## 馬場 正尊

(東北大学大学院工学研究科教授)

工作的建築へ。

かつて物事も建築も計画通りにつくられていた時代、設計と施工は分離されていた。かつて土地の値段がどんどん上昇している頃、やはり建築と不動産は分離した概念だった。物理的にはつながっているにもかかわらず、でも今、それらの境界はどんどん曖昧になっていると思う。建築家が自ら施工もするし、不動産を含めた事業計画からプロジェクトを立ち上げることだってある。時代が求めているスタンスだと思うし、越境しないことには新しい表現も見つからないような気がする。プリツカー賞を獲得したアナベラの建築は、最終的な建築生成を住み手の参加にゆだねてしまっている。ターナー賞を受賞したアッセンブルも、家が作られるプロセス自体が作品の対象である。これらが美しいのはオブジェではなくプロセス。これらの空間は計画的につくられたものではなく、まるで建築を工作しているかのようだ。建築が出来上がるプロセスのパラダイムシフトは、既に行われているのかもしれない。新しい文学を表現したいなら、新しい文体が必要だ。と言ったのはヘミングウェイだっただろうか。新しい建築を表現したいなら、やはり新しい手法、プロセスが必要だと思う。僕は、「大文字の建築」から逸脱するように、躊躇なく領域を横断して仕事をしてきた。なりふり構わず時代や状況に応えようとして、結果そうになっている。でもその先に、新しい建築のでき方や形が存在しているんじゃないかと信じるようにしている。新しい時代の、新しい文体で描かれたような建築の姿を、このコンペで感じたい。

## 藤江 和子

(藤江和子アトリエ)

建築士は、私たち市民の生活環境を、安全にかつ快適に暮らせるように支え整える役割としているのだから、都市計画スケールであっても、また建築規模の大きさに関係なく、人目線からの考察と人間スケールの設えがなければ、社会に受け入れられ、人々にとって居心地の良い生きた建築やいい環境は生まれません。これは公共性の高い空間や施設においては、特に重要な課題です。そこには社会環境を取り巻く様々な目、生きた「生活者の目」が必要なのです。行政、教育、設計、施工など建築士としてのどの立ち位置においても、既存のシステムや領域にとられないソフト、ハード両面からの革新と融合という化学変化により、境界を打破した新しい姿が待たれています。人間に優しいソフトの確立と、高齢化をはじめとする社会の変化や生活スタイルの多様化に対応した豊かな生活空間を実現するには、あらゆる分野の細やかな専門性の発揮やシステムの柔軟な運用、そして様々な分野の新しい技術の結実が必須であり、また建築士は次の時代への継続的な維持管理、子供や一般教養としての啓蒙普及のフェーズにおいても重要な職能の発揮が望まれます。

様々な職能の領域を超えて連携し合う生成機能「シナプス」のような役割が建築士に望まれているのではないかと考えています。

## 藤村 龍至

(東京藝術大学美術学部建築科准教授/RFA)

いま建築を学ぶ現場でよく指摘される、最近の学生は建てることよりも建てないことに興味があるとか、設計系の研究室よりエンジニア系の研究室が人気だとか、就職先はアトリエよりも組織やゼネコンが人気だとかということはおそらく時代の波で、これからの傾向は多少重なるだろうが、これまでもそういう時期はいくらでもあったし「これからの建築士賞」はもう少し長期的な視点で現在を位置づける賞であろう。

建築業界そのものはこの20年、ある種のバブルであった。都市開発系では小渕・小泉政権下で進められた「都市再生特別措置法」(2002年)による規制緩和が不良債権の解消と不動産の流動化を進め、停滞していた建設業界は金融や不動産業界とともに復活した。住宅産業系でも団塊ジュニア世代(1973年前後生まれ)の住宅購入のタイミング(2008年前後)での最後の住宅バブルがあり、少なくとも2000年代はずっと上り坂であった。

しかしそんな好況も開発が一巡し、少子高齢化が進むことで曲がり角を迎えつつあるようだ。これからの建築業界は経営合理化と市場開拓が必須となるだろう。働き方を変え、しごとを変え、収益を拡大し、結果として高度な人材を集め、作品も残す。そんなパワフルな人たちがいたら「これからの建築士」と呼ばれそうである。